

2025 年度 白梅学園大学・短期大学 授業評価アンケート結果報告

白梅学園大学・白梅学園短期大学 FD・SD 委員会

本学では教育の質向上を目指し、学生と教員の間での、学修成果に関する情報を共有する一環として授業評価アンケートを 2002 年度（大学は 2005 年度）から実施してきた。これは授業評価アンケートの結果や学生からのコメントを通じて、教員の指導内容の改善を目指しているものである。そして今後も授業評価アンケートに学生が取り組むことを通じて、自身の学びを振り返り、修得した成果と課題を可視化することに繋げていきたいと考えている。

実施にご協力いただいた各教員には、深く感謝し御礼申し上げたい。

以下、本年度の授業評価アンケートの概要および分析結果についてご報告する。

1. 授業評価の実施主体

白梅学園大学・白梅学園短期大学 F D・SD 委員会

2. 授業アンケート評価の実施方法

(1) 授業アンケートの実施と結果分析

調査の実施および集計は白梅学園大学・白梅学園短期大学教務課が行った。なお、結果分析については、FD・SD 委員会が実施した。

(2) 授業アンケートの実施方法

①実施回数および方法

年度内に 2 回（前期と後期）、ウェブ上（学生ポータルサイト）にて行った。回答は無記名受講学生の回答は昨年通り必須とした。ポータルサイトから繰り返し学生へ周知を行い、各授業内においてアナウンスした。

②対象授業科目

全科目について実施（通年科目、実習指導関係の授業、ゼミを含む）。

③実施時期

前期および後期の実施期間、回答率は以下の通りである。

	実施期間	回答率(大学)	回答率(短大)
前期	2025年 7 月 14 日（月）～8 月 2 日（土）	45%	46.3%
後期	2026年 1 月 5 日（月）～1月 31 日（土）	36.9%	48%

④授業評価の結果公開

大学・短大全体の授業評価結果（全科目の総合集計結果）のみを本学 H P 上にて公開する。個別集計結果についてはウェブ公開しない。なお、教員各自が担当する科目の集計結果については、集計終了後に各教員に開示した。

3. 授業評価アンケートの質問項目

【前期】 【後期】 大学・短大とも同様の項目となっている。

(1) 学生自身の自己評価

- 設問 1 (学習目的) 私はディプロマポリシーとこの授業との関係を理解していた。
- 設問 2 (学習態度) 私は授業をしっかりと受講した。
- 設問 3 (学習態度) 課題や試験の準備に真剣に取り組んだ (でいる)。
- 設問 4 (内容理解) 私はこの授業の内容を十分に理解することができた。
- 設問 5 (総合評価) 私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。

(2) 授業担当者に対する評価

- 設問 6 (熱意態度) 教員は熱意をもって授業に臨んでいた。
- 設問 7 (授業運営) 教員は学生の理解度や反応を考慮して授業を行っていた。
- 設問 8 (授業方法) 授業方法や使用した教材に熱意や創意工夫が感じられた。
- 設問 9 (基本項目) 教員の話し方、声、言葉は聞き取りやすかった。
- 設問 10 (学生対応) 教員は学生の質問や相談に丁寧に対応していた。
- 設問 11 (総合評価) この授業の教員は総合的に評価して良かった。

(3) 授業内容に対する評価

- 設問 12 (授業難易度) この授業は分かりやすかった。
- 設問 13 (授業進度) この授業の進め方のペースは適切であった。
- 設問 14 (教科書等) この授業の教科書・配付資料・プレゼン内容は適切であった。
- 設問 15 (授業内容) この授業から新しい知識、考え方、発想を学ぶことができた。
- 設問 16 (総合評価) この授業は総合的に評価して良い授業であった。

(4) 自由記述

- 設問 17 (授業内容・方法全般) 授業内容・方法や学生対応など、この授業で良かった点があれば挙げてください。
- 設問 18 (授業改善) 授業内容・授業方法・授業課題について改善点があれば挙げてください。また、実際に授業を受けてみて、困ったことがあれば挙げてください。

カテゴリー (1) ～ (3) の回答選択肢は、1：そう思う (5 ポイント)、2：ややそう思う (4 ポイント)、3：どちらとも言えない (3 ポイント)、4：あまりそう思わない (2 ポイント)、5：全くそう思わない (1 ポイント) の 5 段階評価とする。

4. 授業評価アンケートの結果

(1) 質問項目別にみる集計平均値

(大学) 個数 大学前期：4103 後期：2896

設問 番号	質問項目	2025 前期	2025 後期	2024 前期	2024 後期
1	2024年度 前期 私はディプロマポリシーとこの授業の到達目標を理解 していた。		—	4.40	—
	2024年度 後期より 私は、ディプロマポリシーとこの授業との関係を理解 していた。	4.42	4.46	—	4.44
2	私は授業をしっかりと受講した。	4.64	4.63	4.65	4.61
3	課題や試験の準備に真剣に取り組んだ（でいる）。	4.65	4.63	4.65	4.62
4	私はこの授業の内容を十分に理解することができた。	4.47	4.45	4.48	4.45
5	私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。	4.60	4.58	4.60	4.57
6	教員は熱意をもって授業に臨んでいた。	4.71	4.69	4.72	4.69
7	教員は学生の理解度や反応を考慮して授業を行っていた。	4.56	4.56	4.54	4.56
8	授業方法や使用した教材に熱意や創意工夫が感じられた。	4.61	4.61	4.61	4.62
9	教員の話し方、声、言葉は聞き取りやすかった。	4.63	4.64	4.63	4.63
10	教員は学生の質問や相談に丁寧に対応していた。	4.62	4.60	4.61	4.61
11	この授業の教員は総合的に評価して良かった。	4.63	4.65	4.63	4.64
12	この授業は分かりやすかった。	4.53	4.51	4.50	4.52
13	この授業の進め方のペースは適切であった。	4.57	4.56	4.56	4.58
14	この授業の教科書・配布資料・プレゼン内容は適切であった。	4.63	4.62	4.61	4.62
15	この授業から新しい知識、考え方、発想を学ぶことができた。	4.68	4.65	4.66	4.65
16	この授業は総合的に評価して良い授業であった。	4.66	4.66	4.64	4.65

(短大) 個数 前期：873 後期：771

設問番号	質問項目	2025 前期	2025 後期	2024 前期	2024 後期
1	2024年度 前期 私はディプロマポリシーとこの授業の到達目標を理解していた。			4.45	—
	2024年度 後期 私は、ディプロマポリシーとこの授業との関係を理解していた。	4.54	4.49	—	4.54
2	私は授業をしっかりと受講した。	4.70	4.64	4.71	4.76
3	課題や試験の準備に真剣に取り組んだ（でいる）。	4.70	4.65	4.70	4.76
4	私はこの授業の内容を十分に理解することができた。	4.59	4.50	4.56	4.59
5	私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ。	4.67	4.62	4.67	4.74
6	教員は熱意をもって授業に臨んでいた。	4.78	4.71	4.76	4.79
7	教員は学生の理解度や反応を考慮して授業を行っていた。	4.67	4.50	4.62	4.63
8	授業方法や使用した教材に熱意や創意工夫が感じられた。	4.70	4.56	4.67	4.70
9	教員の話し方、声、言葉は聞き取りやすかった。	4.74	4.64	4.71	4.74
10	教員は学生の質問や相談に丁寧に対応していた。	4.72	4.63	4.68	4.71
11	この授業の教員は総合的に評価して良かった。	4.69	4.60	4.71	4.70
12	この授業は分かりやすかった。	4.63	4.49	4.63	4.62
13	この授業の進め方のペースは適切であった。	4.66	4.54	4.68	4.68
14	この授業の教科書・配布資料・プレゼン内容は適切であった。	4.73	4.60	4.71	4.69
15	この授業から新しい知識、考え方、発想を学ぶことができた。	4.75	4.61	4.72	4.74
16	この授業は総合的に評価して良い授業であった。	4.71	4.61	4.72	4.73

比較のため2024年度の結果を併記した。学生自身の自己評価（設問1～5）、授業担当者に対する評価（設問6～11）、授業内容に対する評価（設問12～16）の3つのカテゴリーの各設問項目において、前後期とも設問1を除いては、ほぼ昨年度のポイントと同様の傾向がみとれる。いずれの評価も4.4～4.7（大学短大含む）となっており、学生からの授業評価は高いと言える。ちなみに前後期すべての平均は大学4.59、短大は4.63と高い数値といえる。

（2）自由記述の内容

自由記述については、そのほとんどが授業に対して好意的なものであった。一方で、課題に伴う期限設定の要望や、教員の話し方が聞き取りづらいとの意見も散見された。また前期においては学生からの誹謗中傷にあたる例も見受けられたため、後期は学生の授業評価アンケートの説明に注意喚起をおこなった。その結果後期においては誹謗中傷にあたる意見は見受けられなくなった。

5. 授業改善に向けた課題と成果

（1）2025年度の全体的な傾向

2025授業アンケート平均（主要な質問項目別：大学・短大）

◎ 私はこの授業に意欲的・積極的に取り組んだ（問5）

前期科目		後期科目	
大学	短大	大学	短大
4.60	4.67	4.58	4.62

2024年度 大学 4.60 短大 4.67 大学 4.57 短大 4.72

◎ この授業の教員は総合的に評価して良かった（問11）

前期科目		後期科目	
大学	短大	大学	短大
4.63	4.69	4.65	4.60

2024年度 大学 4.63 短大 4.71 大学 4.64 短大 4.70

◎ この授業は総合的に評価して良い授業であった（問16）

前期科目		後期科目	
大学	短大	大学	短大
4.66	4.71	4.66	4.61

2024年度 大学 4.64 短大 4.72 大学 4.65 短大 4.73

自由記述より一部抜粋

授業でよかった点	改善点
・質問した内容に対して真摯に答えてくれるため学びが深まった。 ・ディスカッションをする機会がたくさんあったのでいろいろな意見を知ることができた。 ・授業外で随時課題に関しての相談にのってくれた為、授業理解が大きく深まった。 ・集中力が続くように途中で休憩をいれてくれるなどの配慮があり、授業理解が深まった。 ・学生との対話を大切にしながら授業を進めている点がよかった。 ・私たちの反応をみながら授業をすすめてくれた。 ・小テストの解説をすぐにおこなってくれたため、自分のつまづきがすぐにわかった。	・先生の声が聞き取りにくい。 ・スライドのスピードが速すぎてしまい理解できない部分があった。 ・課題の提出期限にもう少し余裕がほしい。 ・出席、欠席、遅刻の基準をはっきりしてほしい。 ・空調や機材の不調

自由記述については、改善点よりよかった点についても多くの記述があり、これらの評価を受け、教員側の励みとなっている。双方向での丁寧なやりとり、学生の意見や希望を受け止め、授業の趣旨について合意を図っていることに対しては好意的な回答となっている。

(2) 2025年度の課題と成果

課題

1) 授業評価アンケート実施の周知

課題としては今年度より学生会に協力を仰ぎ、昼休みに学生よりアナウンスを行ってはいるが昨年度より回答率が低下していることである（大学：前期50.2%→45%、後期44.2%→36.9% 短大：前期55.2%→46.3%、後期54.8%→48%）。そのため回答率向上のための方策を検討する必要がある。学生からのアンケートが、以降の本学の授業改善に繋がるという趣旨を改めて認識し、当該授業においても先生方のご協力をお願いしたい。

2) 8コマ授業の場合授業評価アンケートの周知

前後期授業において半期で終了する授業について、特に前半で終了する授業について、授業評価アンケートを周知するタイミングがないという課題がある。

3) 学生の授業内容の理解度について

相対的な評価は高いが、問4（内容理解）、問7（授業運営）、問12（授業の難易度）については、多少ポイントが下がっている。学生の学力に幅が出てきているという実態を踏まえ、学生自身の探究に繋がる授業方法等についても模索し取り組んでいけるようFD・SD委員会でも取り組んでいきたい。

成果

1) 問6（熱意態度）については、前期大学は4.71、短大4.78、後期大学4.69、短大4.71であり、例年高い評価を示している。本学教員の学生に対する教育の熱意が学生に伝わっていることがうかがえるが、このことが本学の最も大きな特徴であり、ヒューマンイズムの精神が具現化されているといってもいいのではないだろうか。

2) 学年進行によるポイント上昇

データを本稿では示していないが、学年が上がるにつれて、授業評価のポイントが上がっている。その要因として、①授業評価アンケートを通じて学生自身が振り返ったことによること、②教員の学生に対する理解が深まったこと、③その結果として、学生と教員の間で相互の理解がより深まったことが考えられる。

3) 授業規模による評価

これについてもデータを本稿では示していないが、授業規模による評価の差異については、小規模1人～25人で実施する授業のほうが、大規模での授業よりも評価が高い傾向が見て取れる。本学は26～50人規模での授業が多く、その次に1～25人規模での授業形態であり、50人までの授業割合は65%となっている。学生は少人数での体験的プログラム、グループディスカッションなどの演習を通して学びを深めているという実感があると考えてもよいのではないか。小規模である本学は、これら少人数での体験的学びのスタイルを実現できる特徴があるとも考えられる。

6. FD・SD研修

今年度のFD・SD研修では「AIと授業（主に大学の授業について）」講師：宮島衣瑛氏（広島大学大学院人間社会科学研究科教育データサイエンスプログラム特命助教）より生成AIと授業の展開方法について全教員が参加し取り組んだ。生成AIの活用はこれからの社会に必須のスキルであるとも考えられる。授業にどのように展開させればいいのか、学生のAIを使ったレポートをどのように評価すればいいかなど課題が多く、本学においてはこれらの取り組みは緒に就いたばかりである。生成AIの進化は早く、大学としても今後ガイドライン等の作成が求められるとも考えられる。

また、多様な学生や障害の有無にかかわらずに学びにアクセスできる環境づくりのため、従前の教育観からの転換をインクルーシブという視点で小国喜弘氏（東京大学大学院教育学研究科教授）より学んだ。今後特別な配慮が必要な学生の授業保障について理解を深めることは、その他の学生と教員との往還的な関係を作るうえでも重要な事であると考えらる。

3) 今後の展望

以上のことから、本学の授業評価における学生からの評価は非常に高いと言える。このような評価が出るということは、学生が全体として学習意欲が高いこと、保育・教育・福祉のこれからの課題に取り組みたいという姿勢などが挙げられるだろう。また、本学教員が熱意を持って学生の教育にあたるという姿勢によっている。そこには、学生を第一に考え授業を展開出来ている結果でもあるのではないだろうか。学生が尊重され、教育を受けることが、学生を育てることに繋がり、学生が卒業して利用者や子どもたちに対しての姿となっていくと考えられる。さらに、本学の建学の精神であるヒューマンイズムの精神として根づくであろう。

また教員の質の保障のためにもFD研修会について、教員の要望を踏まえ、全学的に取り組む必要がある。